

一二月二四日 水曜日

他人がクリスマスに熱中している間、僕は休みを利用して、ポーのレーバンを五七調に直して見た。アンドレアの絶交状を貰った晩にレーバンの夢を見て以来、不眠状態が続き、それからの解放を求める苦肉の策だった。それが今日出来上がった。出来は悪くない。

(渡り鳥の歌)

真夜中に 戸惑う我が身ふみ

古めきし 本読み疲れ 眠氣さし トントン誰か 戸を叩く 柔らか
にトン 客なりや 柔らかになし 外になし

いとわびし 師走の夕べ 燃えさしが 消え去り行くに読み終えて
日の出待つのみ取り去れよ 心の痛み

レオノーレ 今亡き妹子の 名は消えて とこしえになし

紫の 窓掛け揺れて

さらさらと 見えざる恐れ留めよと ときめく胸を 抑えつつ客來たり
しや 独り言 晩客なりや

そのみで 外になし

勇みつき 心戻して

わが君の 許し乞うなり 眠りたる 我にトントン 叩く音 か
すかに聞こえ とりなおし 戸を開け見れば暗闇で 外になし

暗闇に 恐れが戻り

悪しき夢 生き心地なし 静けさは 闇を閉ざせず レオノーレ
その名ささやき我が言葉 木霊にかわる そのみで 外になし

部屋に入り 心は痛む トントンと さらに響きて何者が 格子窓
にと

この不思議 見極めねばとときめきを 抑えてみれば風のみで 外にな
し

兩戸開け 羽ばたきたてて入りこみし 渡りからすは怖気ずに 我が物
ごとく

戸の上に 大物らしくパラス像 止まり木にして座りこむ 外になし

居間には私たちがパラス像(アテネの女神)を備えている。古典を専攻したナ

ンシーの為に、父が何処かのせり売りで買ってくれたものだ。もしこの女神の像をいやらしい鳥が止まり木にしたら、私はいち早く箒を持って追い出したに違いない。ポーは変わり者だ。鳥と対面してその素性を究めようとする。高校生の時にを暗記した。今でも最初の六行はすらすらと出てくる。

Once upon a midnight dreary, while I pondered, weak and weary,
Over many a quaint and curious volume of forgotten lore--
While I nodded, nearly napping, suddenly there came a tapping,
As of some one gently rapping--rapping at my chamber door.
"Tis some visitor," I muttered, "tapping at my chamber door
Only this, and nothing more."

ポーは言葉使いの天才。この詩には頭韻も使われている。それを日本語に直訳することは不可能。しかし五七調で意識すると頭韻を味わうことが出来る。武彦の着想と文才を見直した。彼の翻訳は続く。

わが憂い 笑いに変わる黒鳥の 鋭き目つき 弱みなき 禿の頭角
黄泉路では み名は何かと青ざめて 我訊ねれば 鳥は告ぐ 否す
べてなし
みすぼらし 鳥と問答
摩訶不思議 意味はなしなし
人の子が 鳥か獣を 戸の上の 像の上辺に
見たるとは 妙なる知らせ鳥の名は 否すべてなし
胸像に 静かに座り 一言に すべて打ち込む黒鳥は 羽ばたきもせ
ず
日明ければ 飛び去りませと我願ひ 知る由もなく
鳥は言う 否すべてなし
静けさを 破る一言 この鳥の 言葉のすべて飼主が 秘めた悲し
み
言い盡くし 盡くしきれずに
言い残す 挽歌を歌えば否や否 否すべてなし
そのわざにつるりつられて戸の前に 椅子を構えて ぐったりと
座布團深く 座り込み 思案にくれると 不氣味なる 老いぼれ鳥が 何で
鳴く 否すべてなし
尋ねれど 言葉にならず 鳥の目が 胸を突き刺す 座りつつ 占い見る

に 座布團に 光さすなり すみれ色 光さすなり 妹子なりや
否すべてなし

何処より 香りきたるか み使いが 下りませるか 君が神 そなた使わ
す レオノーレ 忘れさせます妙薬を がぶがぶ飲めど 鳥は告ぐ 否す
べてなし

巫女なりや 悪魔か鳥か 台風が ここに飛ばせた 君に乞う 我が家は
乱れ 何無きも まこと知らせよギレアデに 聖薬有りや 鳥は告ぐ 否す
べてなし

巫女なりや 悪魔か鳥か

神と空 崇めるならば 悩み持つ 我に知らせよ アイデンに あの
美しき レオノーレ 今いませるか鳥は告ぐ 否すべてなし

退けと 我叫ぶなり 台風と 黄泉路に帰れ

羽と虚偽は すべて残さずわが寂し 心乱さず

去れよ去れ 痛み取り去れ鳥は告ぐ 否すべてなし

座り込み 羽ばたきたてず黒鳥は 知恵の女神を 止まり木に 悪魔
のごとく

陽炎を 床に広げり わが魂は 影を彷徨い 上りしや 否すべてな
し